



『講座 生存基盤論』

地域研究における自然—人間相互関係の解明に関する一考察

横山 智\*

A Study on Nature-Human Interaction in the Field of Area Studies

YOKOYAMA Satoshi\*

柳澤雅之；河野泰之；甲山 治；神崎 護（編）. 『地球圏・生命圏の潜在力——熱帯地域社会の生存基盤』講座 生存基盤論 第2巻. 京都大学学術出版会, 2012, 352p.

I はじめに

地域研究という専門分野は極めて「多様」である。地域研究者の多くは、自らの専門を単に地域研究とすることはなく、「○○地域研究」と称する。○○の部分には具体的な国名や地域名が入るのみならず、「イスラーム」のように宗教名が入ったり、「スペイン語圏」のように言語名が入ることもある。これは、地域研究が扱う地域概念が多様なことを示している。

加えて、地域研究は「捉えどころがない」。地域研究の学位は限られた少数の大学でしか取得できないし、また科学研究費補助金の申請分野として地域研究が加わったのも、既存ディシプリンと比べてかなり遅かった。そして地域研究者は、もう一つの既存ディシプリンを持っているのが一般的で、既存ディシプリンの研究手法を援用して調査分析を進めることが多い。さらに、日本学術会議地域研究委員会から2010年に提出された報告書『地域研究分野の展望』において、地域研究は「エ

リア・スタディーズ分野」「人文・経済地理学分野」「文化人類学分野」「国際地域開発学分野」「地域情報学分野」の5分野から構成されるという見解が示されている〔日本学術会議地域研究委員会2010〕。アメリカから輸入された「エリア・スタディーズ分野」以外は、地理学、人類学、経済学、政治学、情報学などの既存ディシプリンが核になっているのである。このような「捉えどころがない」状況が、「地域研究は、ディシプリンなのか、それともアリーナなのか」〔田中2009〕という議論が生まれるきっかけとなっているのだろう。この問いに答えることは容易でない。

しかし、地域概念の捉え方が異なったり、また研究者間のバックグラウンドが異なったりしても、フィールド調査に基づく対象地域へのアプローチには、共有できる部分が多いはずである。そして、調査から紡ぎ出された問いをさまざまな当事者が共有することが地域研究にとっては必要なことでもある。そこで本稿は、ディシプリンとしての地域研究において、自然—人間相互関係の解明に求められる「問い」のあり方について、2012年3月に刊行された『地球圏・生命圏の潜在力——熱帯地域社会の生存基盤』の成果と課題を検証しながら論じることを目的とする。

本書は、現在の熱帯地域の生存基盤が維持され

\* 名古屋大学大学院環境学研究科地理学講座；  
Department of Geography, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan  
e-mail: s-yokoyama@nagoya-u.jp

ているのは、人間圏と地球圏・生命圏との相互作用の結果であるとし、各章で自然－人間相互関係の議論が展開され、最終的に熱帯社会の地球圏と生命圏をどのようにケアすべきかという問いが提起された。なお、本書を取り上げた理由は、第一に、同じ所属機関で5年間にわたって実施された京都大学グローバルCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」で生存基盤論の共有化を図ってきた研究者たちによって執筆されており、ディシプリンとしての地域研究の成果を見ることができるところである。第二に、執筆者が、農学、林学、生態学などの自然科学系の研究者だけでなく、人文地理学や文化人類学などの人文学をバックグラウンドに持つ研究者から構成されているため、学際的な共同研究のアーリーナとしての地域研究の一面も持ち合わせているからである。

## II 『地球圏・生命圏の潜在力 ——熱帯地域社会の生存基盤』の概要

本書は、2007～12年に実施された京都大学グローバルCOE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の最終成果として出版された全6巻の『講座 生存基盤論』シリーズの第2巻として刊行されたものである。その構成は、序章と本文11章から成り、本文は4つの編に分けられ、各編には2つないしは3つの章が収められている。各編の最初には、担当編者によって、編のねらいと各章の概略がまとめられている。

序章「熱帯生存基盤の再構築——地球圏・生命圏と人間圏の相互作用系」（柳澤雅之・河野泰之・甲山 治・神崎 護）では、最初に本書が「地球圏・生命圏と人間圏の相互作用を、おもに森とともに暮らす人々や農を営む人々の生業や生活の現場」（p.2）にフォーカスをあてることが述べられ、人間圏が地球圏や生命圏とのさまざまな相互作用の積み重ねによって形成されたことを説明する。そして、熱帯生存基盤の再構築のためには、地球圏や生命圏のケア、すなわち人間圏の技術と制度の歴史を鑑み、地球圏や生命圏を再度深く観察して理解することの必要性を訴える。

第1編「地球圏・生命圏の動態と生存基盤」では、気候変動・水循環と人間社会との関係を論じ

る章が置かれる。第1章「地球圏からみた熱帯——気候システムを中心に」（甲山 治）では、熱帯地球圏の気候システムを説明する。教科書的な内容ではあるが、最新のデータも盛り込まれており、後章の内容を理解するためには無くてはならない章である。第2章「気候変動・食糧生産・農村社会——1582年から2009年のフィリピン」（J.F.ウォーレン）では、エルニーニョ・南方振動（ENSO）と干ばつ、食糧不足、さらには農村社会変動や伝染病拡散の関係性をフィリピンを事例地域として明らかにする。第3章「水循環をつうじた無機的自然・森林・人間の相互作用系」（谷 誠）では、人間による地表面（森林）の改変と、その改変による熱帯の水循環の変化が述べられる。

第2編「森とともに創り出す生存基盤」は、生命圏としての森の利用にフォーカスが当てられている。第4章「生存基盤としての熱帯多雨林——択伐天然林における木材生産」（神崎 護・稲田友弥・野草俊哉）では、天然林の択伐施業から特定樹種生産のための列状植栽へと変化したインドネシア林業について、とくに森林管理の方法について議論される。第5章「焼畑耕作が創出する生存基盤——種多様性が保持されるメカニズムに着目して」（福島万紀）では、タイ北部の焼畑耕地の資源利用、とくに長期休閑を維持することによって焼畑二次林から得られる資源が生存基盤の維持に重要な役割を果たしていることが紹介されている。第6章「農の場としての森林——森林を利用したチャ栽培の構造と多面的機能」（佐々木綾子）では、タイ北部の伝統的な後発酵茶「ミアン」を事例に、森林とチャ生産の持続性、そして市場変化と生産変化との関係性を描き出している。

第3編「農が創り出す生存基盤」では、農の営みを取り上げることで、人間が地球圏と生命圏といかに向き合ってきたのか、土地利用の技術にフォーカスをあてる。第7章「樹木を組み込んだ耕地利用——作物の時空間配置から熱帯の未来可能性を考える」（田中耕司）では、著者のこれまでの豊富なインドネシアでのフィールド調査経験をベースに、タルン・クブンシステム（アグロフォレストリーの一形態）を中心に、小農による在来の耕地利用と作付体系の特徴が示される。第8章

「セネガルのセレール社会における生業変容と人為植生——樹木資源をめぐる技術と制度の変化」(平井將公)は、ポリティカル・エコロジカルな視点から、家畜飼養方法などの社会変化と共に樹木資源「ソース」と生活との関わり方も変化していく様子を描く。第9章「ベンガル・デルタの洪水、サイクロンと在地の技術」(安藤和雄)では、自然災害を軽減するための屋敷地の造成と維持、そして在地の技術を基に試行錯誤で新たな作付体系を開発していく過程が紹介される。

第4編「熱帯生存圏における時間」は、人間社会から地球圏や生物圏への働きかけを、時間スケールに着目して解き明かすことを試みている。「人間圏では、独自の論理にしたがって時間スケールを確立しようとするモメンタムがつねに働いている」(p.254)ので、地球圏と生物圏をケアするには、その時間スケールの再考が必要だと主張する。第10章「熱帯生存圏における農業発展のメカニズム」(河野泰之・佐藤孝宏・渡辺一生)では、東南アジア大陸部山地や南アジアの農業発展の事例を踏まえながら、地球圏と生物圏へのケアの仕方を探る。第11章「熱帯バイオマス社会の複雑系——自然の時間、人の時間」(石川 登・祖田亮次・鮫島弘光)では、焼畑、非木材森林産物、木材伐採、プランテーションなどの具体的な生産活動を事例に、熱帯雨林で高いバイオマスを有する社会の特徴を生産活動の時間スケールの違いから論じている。ここでは、焼畑の「擬似ローテーション」という短期的には不規則に見えるが、結果的にはローテーションが成し遂げられている焼畑耕地選択の実態が示された。

なお、本文最後の「おわりに」(河野泰之・神崎護・柳澤雅之・甲山 治)には、本書の成果と課題がまとめられているが、その内容は本書全体に関わる部分であり、かつ研究の問いの設定と問題共有のあり方について議論するのに有用なテーマを提供している。よって、次セクションで詳細に取り上げて論評したい。

### III 自然一人間相互関係の捉え方と パラダイムの形成

本書は、人間が自然に働きかけ、自然を制御し

ようとするような、たとえば「都市化」や「グローバル化」に伴う土地・資源利用の変化が世界各地で起こっている一方で、環境が改変されても伝統的生業を維持するために努力を惜しまない人々の姿も描かれている。収められている論文の内容に偏りがなく、総合的視点から多様な自然一人間相互関係を描き出している。また、現在生起している現象だけを取り上げるのではなく、発展経路を解明して、地域を動的に理解しようとする試みも類書には無い視点である。したがって、自然一人間相互関係に興味を持つ読者には、どの章も参考になる内容であろう。ただし、本書は誰でもが理解できるレベルでは編まれていない。おそらく、専門分野を学修した大学院生以上が対象読者として想定されていると思われる。

さて、本書の成果と課題がまとめられた「おわりに」で展開されている議論の内容に移ろう。編者らは、熱帯地域社会の持続型生存基盤を考えるために「人間圏の時間スケールの再考」「当事者性の拡張」「人間圏の多様性」の3つの発展パラダイムを提示している(pp.318-322)。各章の論考は、これらの発展パラダイムを論じるために書かれたわけではないが、それぞれのパラダイムはどの章の議論を参考に導き出されたものか示されている。よって、具体的にイメージしやすくまとめられている。

最初に提示された「人間圏の多様性」は、多様な人間圏が多様な地球圏や生命圏と対峙するため必要となるので、この視点に対しては論を俟たない。しかし、このパラダイムの説明では、自然と文化の関係性の視点が欠けている。人間の環境への適応過程に関しては、既存ディシプリンでもさまざまな議論が行われている。とくに1960～80年代にかけて、地域の人々の自然への働きかけを文化から説明する研究が盛んに行われた。地域・民族独自の文化的背景を考慮しつつ、人々の自然環境への適応や働きかけを捉えようとしてきたのである。その背景には、1910年代に盛んになり、その後タブー視された「環境決定論」の呪縛から逃れるために文化が自然と対峙するものとして据えられたという事情があったことは否めない[小林1992]。しかし、文化の存在が自然一人間相互関

係に影響を与えていること自体は否定することはできない。ところが、本書では地域の人々の文化に規定された自然とのつきあい方に関する紹介はほとんどなされていない。「人間圏の多様性」が重要だと訴えるならば、文化多様性を絡めた議論も必要になることは言うまでもない。環境変化に影響すると考えられる文化要素を持続型生存基盤の概念に取り込む方法に関しても論じて欲しかった。

次の「時間スケールの再考」は、わずか数十年単位で考えられてきた人間圏の時間スケールは、数百年や数千年単位で変化したり反復したりする地球圏・生命圏の時間スケールとあまりにも違いすぎる点を指摘する。よって人間圏の時間スケール概念を切り離すことを再考しようとしている。

最後に示された「当事者性の拡張」とは、温帯の制度・技術を用いて熱帯の開発がなされたり、温帯のために熱帯の資源が利用されたりする現在のケアの構造そのものを問題とする見方である。人口増加やグローバル化の進展により、これまで問題とならなかったことでも、熱帯地域が持つ豊穡性や弾力性の限度を超えたことで問題が顕在化し始めたのではなかろうか。これまでの開発は温帯に位置する欧米技術の熱帯への移転であったが、これからは熱帯の人々が自らの意志で、自らの資源を利用し、自らの制度を作るためのディスカッションの場が必要となるであろう。

最終的に本書では、人間圏において地球圏・生命圏のケアをする社会が必要であると結論づける。それは、新しい概念の提示と捉えるべきで、問題の解決策ではない。しかし、解決策を提示していないことで本書の価値が下がることはない。そもそも、地球環境の持続性を維持できる生存基盤のあり方を探るといった大きな課題の答えなど、我々は持ち合わせていないし、環境問題や南北問題の教科書に書かれているような一般論を提示する必要もない。本書に与えられた役割は、熱帯の生存基盤の「概念」を示し、新たな発展パラダイムを提起することであり、その役割は十分に果たすことができた。

総合的な理解が求められる自然－人間相互関係の研究では、事例を積み重ねていくことによって複雑なつながりを可視化すること、加えて、これ

まで地域に内在していたが見えなかった問題を認識することが重要である。本書では、森とともに暮らす人々や農を営む人々の生業や生活の現場において、人々の叡智を集め、また発展経路を解明し、問いを設定した。地域研究の方法論として、既存ディシプリンとは異なる総合的な問いのたて方、また、問いをたてるプロセスを具体的に示したことが重要である。

#### IV むすびにかえて

##### ——ディシプリンとしての地域研究と総合力

おそらく、今後我々が検討すべき課題は、地域研究とは一見関係のなさそうに思えるが、実は重要なキーとなる「ケアの倫理」の概念を、従来の地域研究とどのように接合できるのかを探ることである。本書を編む上でベースとなっているのは、これまで実施されてきた京都大学での地域研究であることは疑う余地はない。とくに東南アジアやアフリカの地域研究に関しては、世界トップレベルの研究成果が蓄積されている。それらの研究成果を踏まえて、グローバルCOEのプロジェクトでは、学際的アリーナではなく、ディシプリンとしての地域研究という立場から、熱帯の持続的生存基盤を論じることを試みた。

しかし、「はじめに」と「おわりに」で論じられている研究枠組みは、環境倫理学の命題と極めて近い。本書において議論の前提となっている「人間圏と地球圏・生命圏との相互作用」の理論的部分に関しては、すでに1970年代から環境倫理学で「人間中心主義」を批判する論争や自然に対する新たな捉え方としての「ディープ・エコロジー」のような概念形成の議論が行われている[加藤1998; デ・ジャルダン2005]。持続的生存基盤が目指すべき最終的な到達点は、「人間としての倫理」の問題とも重なる。よって、人間圏の形成を土地利用史的な側面だけでは捉えられないのは明白であり、地域研究としての総合力が要求される。

また、ケアという概念を提示するとき、それは本書で示された「当事者」の範囲が検討課題となる。鬼頭[2012: 253]は、トーマス・クーンの『科学革命の構造』で論じられた内容に触れて、「パラダイムに規定されているある種のノルムや価値を

共有した『科学者集団 = scientific community』のなかでしか『科学的営為』は存在しない」と専門職業化した科学について述べている。<sup>1)</sup> 地域研究をトーマス・クーンの科学社会学の理論にそのまま当てはめれば、科学者集団とは地域研究者集団であり、科学的営為とは対象とする地域に対して行われるケアということになる。すなわち、パラダイム形成は、科学の営みを共有する「当事者」である地域研究者のなかだけで終わってしまうのである。しかし、地球圏や生命圏をケアするのは、自然-人間相互関係を専門とする地域研究者だけであってはならない。よって、地域研究の共通目標として「ケア」する「当事者」の拡大が設定されるのである。

この視点に立脚すれば、「持続的生存基盤」や「地球圏や生命圏のケア」の理論には、環境倫理学、科学哲学、科学社会学とのコラボレーションが必要となる。ディシプリンとしての地域研究は、これまで以上の総合力が求められるのであり、それはチャレンジではなくミッションだと言えるのではなかろうか。本書からは、改めて地域研究について深く考える機会を与えてもらった。地域研究における自然-人間相互関係の研究についての議論をさらに深めるためにも、できる限り多くの方に本書を手にとりて欲しいと願う。

## 参考文献

- デ・ジャルダン, J.R. 2005. 『環境倫理学——環境哲学入門』新田 功; 生方 卓; 藏本 忍; 大森正之 (訳). 東京: 人間の科学新社. (原著 Des Jardins, J.R. 2001. *Environmental Ethics: An Introduction to Environmental Philosophy*, 3rd ed. Belmont, CA: Wadsworth Pub.)
- 加藤尚武 (編). 1998. 『環境と倫理——自然と人の共生を求めて』東京: 有斐閣アルマ.
- 鬼頭秀一. 2012. 「民俗学における学問の『制度化』とは何か——自然科学の『制度化』のなかから考える」『民俗学の可能性を拓く——「野の学問」とアカデミズム』岩本通弥; 菅 豊; 中村 淳 (編), 249-264 ページ所収. 東京: 青弓社.
- 小林 茂. 1992. 「生業活動研究の発展と文化地理学」『人文地理』44(4): 38-56.
- 日本学術会議地域研究委員会 (編). 2010. 『地域研究分野の展望』東京: 日本学術会議.
- 田中耕司. 2009. 「すべては出会いから始まった——地域研究はディシプリンかアリーナか?」『SEEDer』1: 67-71.

1) 「野」の学問として発展してきた民俗学における学問の制度化について論じた論文である。民俗学では、学問としてのあり方や制度化が1990年代から議論されている。地域研究における「アリーナかディシプリンか」での議論とも重なる部分が多い。